

活動報告書

この活動に参加したきっかけ

私が小学生だった時、初めてカンボジアという国を知り、そしてこの国が世界最貧困国であると教えてもらった。今も地雷という爆弾があちこちに埋まっており、人々は安心して暮らせないという。日本では2～3日で治るような風邪などの病気で、命を落としてしまう子供の多い国なのだそうだ。はじめてその話を聞いたとき、わたしは大きく衝撃を受けた。そんな不安な国に住むはずなのに、写真に写る子供はみな、私が今まで見たことのないほどきらきら輝いた笑顔だったのだ。その時から、私はいつかカンボジアへ行ってみたいと単純に思っていた。

数あるカンボジアボランティアの中で、私がこの団体を選んだ理由はいくつかある。まず、地雷撤去活動に従事できるということだ。私が参加したことにより、子ども一人遊べる広さの安心が出来るのだ。素人の私には地雷を撤去できないし、ただお金だけを渡すような人間にはなりたくなかった。もっともっと自分の目で、あの子供たちの笑顔が見たかった。だからアンロンベン村の小学校やクオルサー・トマイ孤児院、アンコール小児病院、プノンペン・スラムに行くことができ、子供たちと触れ合いながら支援物資を渡すことができるということも選んだ理由のうちの一つだ。

最後に、このツアーの名前がボランティアツアーでないことである。この12日間、私がかをかやってあげるといふ気持ちのボランティアだと思いたくなかった。多くの出会いの中で学んだこと、感じたことを帰ってきた日本で生かしていきたい。それが可能であると思っただけ、このツアーに参加した。

12日間の主な活動と感想

初めに事前研修があり基礎知識を学んだのち、日本にいる間にできることを話し合うことができた。普段なかなかできないような深い交わりをした。

前半のベトナムは、主にベトナム戦争について学んだ。戦争証跡博物館、クチのトンネルへ行き、ほかにも「ベトちゃんドクちゃん」のドクさんとお話することができた。戦争によって苦み、また今も後遺症で苦しんでいるという点で日本とベトナムは似ている。また自由行動ではフエへ行き、世界遺産を観光するとともにここでも戦争によって失われてしまったものの多さを知り、ベトナム戦争の爪痕を感じた。

後半、カンボジアでの活動で、子供たちと出会い、感じたことが多くあった。

6日目、私たちはみんなで1ドルずつ出し合って大量のパンを買い、プノンペンのスラムへ行った。孤児たちの多く集まる場所だが、日本のNGOにより住むところが整えられている恵まれたところだったと説明を受けたが、私はその場にいることがつらくなった。あれだけの大量のパンだったのだが、配り始めるとあっという間になくなってしまった。

子供の多さにも驚いたし、配る時も並んでくれず取り合いになってしまった。もらっていない子もたくさんいる中、2～3個持っている子もいた。私にとってあたりまえだと思っていたことが崩れた瞬間だった。

その後、一緒に遊んだのだが、子供たちはずっときらきらした笑顔をしている。明日も来るか、パンを持ってきてくれるか聞かれたが、私は答えることができずに涙が出た。自分のしたことが正しかったのかわからなくなった。直接現地で物を届けることは、必ずしも正しい支援ではないと感じた。

7日目、ゴミ山へ行った。普段は警備員がいて入れないというこのゴミ山は、私の想像をはるかに超えていた。日本にいるだけでは知ることができなかつた、言葉では表現できないものである。見たことのないほどの虫の数、嗅いだ事のない強烈なおいの中、ここでもきらきら笑う多くの子供たちにまた出会うことができた。彼らは一度捨てられたものの中から再利用できそうなものを集めて売り、生活をしているのだ。

私は写真を撮ってはいけないと思った。なぜかわからないが、彼らの生活を撮ってはいけないと思った。しかし、子供たちは常にピースサインをする。この子たちは自分の姿を見ることができないから、写真を撮られたいのだと言われた。だから子供たちの笑顔を写真に撮り、見せてあげた。

8日目、カンボジアで一番といわれるアンコール小児病院を訪れた。ここでは、日本からの大量のガーゼを届けた。この病院は日本では想像できないような病院だった。私が一番衝撃を受けたのは、待合室だけでなく病院食を作る場所も外だった。虫が飛んでいる中で作られたご飯が、カンボジアで一番といわれる小児病院なのかと感じた。どこの科も混んでいて、子供の多さも感じた。

9日目、アンロンベン村の小学校へ行った。この小学校は UNICEF の支援により作られた学校で、電気やガス、水道がなかった。そこでみんなでカレーを作った。大きいドラム缶の中で火をおこし、大きい鍋で作った。肉も野菜も持ってきたミネラルウォーターで何度も洗ったり、よく火を通したり寄生虫に気を付けながら作った。

この小学校ではアンコール大学の学生と事前に話し合い、勉強に興味をもってもらえるような理科の実験を披露した。私たちが帰った後、またできるように身近なものを使った実験ということに気をつけ、私たちのグループでは、みかんの皮で風船を割る実験を披露した。

そして最後にマングローブの木を植えた。これが大きくなれば、涼しい木陰ができる。アンコール大学と私たち日本の大学生が共同で12本植えた。

この交わりはアンコール大学の学生に日本語を教えることにもつながる。彼らは支援に来た日本の大学生との交わりの中で日本語の技術を上げていくという。たった数か月で日本語をある程度話せるようになっていく彼らを見て、意識の高さに驚かされた。英語、日本語以外の語学も積極的にこなしている彼らは、いつか私たちのライバルになる。これからの大学生活、真剣に勉強がしたくなった。

11 日目、クオルサー・トマイ孤児院で、日本で集めた衣服を届け、一緒に遊んだ。ここでもアンコール大学の学生と一緒に交わりをした。私は、言葉が通じなくても笑顔があればこんなに親しく交わることができる。子供たちの笑顔を見てエネルギーを得ることができ、日本へ帰国した。

活動を終えた感想

日本に帰ってきて数日は、違和感があった。帰国後すぐにあった事後研修でも、多くあがった意見だった。しかしそんな違和感も気付けばなくなってしまった。あの時の思い、気持ち、現地でしか感じるができない。この 12 日間で私が現地で何かをしてきただなんて思わない。たくさん学び、たくさん笑顔をいただいた。私のほうが、たくさんのもをいただいたのだ。

一番感じたのは、彼らは私たちから見れば貧しいが、決して困ってはいない。むしろ彼らは自分たちを貧しいと思っていない。人を「貧しい」と評価している私の心のほうがよっぽど貧しい。「貧困国」という偏見を持って国境を越えた自分が恥ずかしくなった。ベトナムもカンボジアもすべてが、きらきらきれいで輝いていた。

彼らは毎日毎日を全力で生きている。明日や将来を不安に思っていない。私が何度も見たあの笑顔は、今日を一生懸命生きているからこそ生まれるものだと思う。

この秋映画「僕たちは世界を変えることができない」が公開される。また 10 月には京都でカンボジアフェスティバルが開催される。今注目されているこの国の現状を、実際に見てきた私の口から、正しく伝えていきたい。この貴重な日々を素敵な思い出にせず、多くの人に伝えていきたいと思う。